

## 研究ノート

# ラブドール研究試論

関根麻里恵

### 1. はじめに

2016年1月、第64回東京芸術大学卒業・修了作品展に出展された菅実花による「ラブドールは胎児の夢を見るか? (Do Lovedolls Dream of Babies?)」がインターネット上で話題となり、さまざまな議論が交わされた<sup>1)</sup>。菅は、2014年からラブドール——かつてダッチワイフ (Dutch Wife) と呼ばれていた、主に男性が自慰のために使用する等身大の女性型人形——が妊娠するという架空の設定に基づくアートプロジェクト「ラブドールは胎児の夢を見るか?」を開始したが、なかでも注目されるきっかけとなった「未来の母 (The Future Mother 06, 07, 09)」は、妊婦が出産に至るまでの過程を記念に残す「マタニティ・ヌード・フォト」の形式をとっている。絶対に人の子を孕むことのないラブドールの身体が妊婦姿で眼前に現れるとき、鑑賞者は少なからず動揺したことだろう。その動揺は想像以上に多くの鑑賞者に対して起こり、まるで本当にラブドールが妊娠したかのような反応——女性が産む身体から解放されるといったポジティブなものから、神への冒瀆、女性の尊厳を侵害しているといったネガティブなものまで——が菅に寄せられ、インターネット上でもさまざまな意見が飛び交った。

この議論はインターネット上だけではなく、学術的な場でも展開された。例えば、2016年9月、菅の作品に触発された女性研究者たちが、シンポジウム「孕む身体表象—その身体は誰のものなのか?」(イメージ&ジェンダー研究会、2016年)を開催、2018年1月、そこでの発表を土台に妊娠表象の歴史的・現在的意義を考察したものをまとめた『〈妊婦〉アート論—孕む身体を奪取する』(青弓社、2018年)が出版された。

偶然にも、菅の作品が発表された2016年から2017年にかけて、ラブドールにまつわる展覧会の開催や出版物が続々と登場する、一種のムーブメントが起こった。もちろん、2010年代後半に突如としてラブドールをテーマとした展覧会や芸術作品などが登場したわけではない。銀座にあるヴァニラ画廊では、2007年から2、3年周期で大手ラブドール・メーカーであるオリエント工業の協力のもとラブドールの展覧会が行われている。なかでも2017年5月20日から6月11日に渋谷のアツコパルーで開催されたオリエント工業創業40周年記念「今と昔の愛人形」展は、同年6月7日の朝日新聞(朝刊)で紹介され、大きな話題となった。紹介記事では、特に女性の来場者が多いことに焦点が当てられ、ラブドールは本来、男性向けのいわばアダルト・グッズであるにもかかわらず、エロティックなものであることよりも造形のかawaiiさが前景化され、そこで受容されていることが指摘されていた(木村)。

さて、ここまで挙げてきたラブドールの例は、基本的に〈みる〉ことを前提としたものである。ラブドールはダッチワイフと呼ばれていた頃よりも、特に顔の造形がより人間に近くなった。つまり、鑑賞に耐えるようになったからこそ、ラブドールを〈みる〉楽しみができたといえるだろう。しかし、ラブドールの展覧会の多くは実際にラブドールに触ることができるコーナーを設けており、メーカー側——ここではオリエント工業——は本来の用途である〈触れる〉こと、つまり、ユーザーの身体と接触するラブドールの〈皮膚〉をいかに人間に近づけるかへの探究も同様に行なって

いる。その証拠に、ラブドールに使用される素材はラテックス、ソフトビニール、ウレタン、シリコンなど、次第に人間の皮膚に近い素材を用いるようになっていく。

日本におけるダッチワイフやラブドールに関する先行研究は少ないものの、ダッチワイフからラブドールへとという歴史の変遷をたどったもの（高月、2009年〔初版は2008年〕；西村、2004年）、ユーザー、製造元へインタビューをまとめたもの（高月、2009年；荻上、2011年）、人体模倣の文脈における生死の問題との関係からこれを扱ったもの（西村、2008年）、アメリカと日本のラブドールの比較（高月、2010年；西村、2017年）などがある。しかし、これら先行研究のなかでは人間とラブドールの接触——触れること、抱くこと、ひいては性行為の対象とすること——をあまりにも当然視しているがゆえに、ラブドールの〈皮膚〉——使用される素材の変化——や〈触れる〉ことの重要性にはさほど注目されてこなかった。もちろん、素材の変化について全く指摘がなされていないわけではない。しかし、どうして〈皮膚〉を変化させる必要があったのか、ユーザーがラブドールに〈触れる〉ことでなにがもたらされるかについてはほとんど言及されてこなかった。また、ラブドール以外の等身大人形として、生人形や蠟人形、解剖学人形やマネキンといったものが挙げられるが、いずれも〈触れる〉ことを前提にはしていないため、時代によって見た目が変化しようとも、〈皮膚〉が大きく変化することはなかった。これら等身大人形とラブドールの違いとして、やはり〈触れる〉ことを前提とした〈皮膚〉の存在は大きいのではないだろうか。

本稿では、〈触れる〉という観点からラブドールの前身といわれるダッチワイフに注目し、第2章で①いつからダッチワイフと呼ばれるものが登場し、なぜそう呼ばれていたのかについて、第3章で②いつからダッチワイフが性的なものを含意するようになったのかについて検討する。一見すると、この2点には〈触れる〉要素が見当たらないようにみえるが、実は密接に関わっていることが明らかになる。そして第4章では、性具としての等身大人形について紹介し、ダッチワイフが性交渉の代用人形として一般的に認識されるようになった要因について確認する。第5章はまとめと今後の研究の展開を示し、本稿をラブドール研究の出発点にしたいと考えている<sup>2</sup>。

## 2. 何がダッチワイフなのか

前述の2つの問いに答えていくために、「ダッチワイフ」に関して特徴的な記述がある4つの辞典を手がかりにし、先行研究と新聞記事を参照しつつ検討する。まず辞典で「ダッチワイフ」を引いたところ、【表1】のような意味を確認することができる。

まずは①いつからダッチワイフと呼ばれるものが登場し、なぜそう呼ばれていたのかについて検討する。【表1】をみると、いずれも竹・籐製の長い枕、等身大の（性的な

辞典名	『辞解外来語辞典』	『基本外来語辞典』	『カタカナ語・略語辞典 改訂新版』	『日本国語大辞典 第二版』
発行年	1979年	1990年	1996年	2001年
出版社	角川書店	東京堂出版	旺文社	小学館
語義	等身大の精巧な性器を備えた人形。戦地や極地などで男性の自慰の対象として用いる。 ◆もとは熱帯地方で暑さしのぎに抱いて寝る竹・籐製の枕状のかご（手足載せ）をいう。	① 熱帯地方で寝るときに使う籐製のまくら。 ② 代用女性人形	① 暑い地方で涼しく寝るために手や足をのせる籐製の台。竹夫人。 ② 女性の代用にする人形。抱き人形	① 竹または籐製の長い枕。熱帯地方で暑さしのぎに手足をのせたりする。竹（ちく）夫人。 ② 模造性器を備えた等身大の代用女性人形
備考	「健康と医学（セックス）」という項目に記載あり	①の意味は戦前戦中の時代。②の意味は戦後昭和と平成時代に割り当てられている	初版は1990年発行	第一版は1972年発行

【表1】ダッチワイフの語義一覧（発行年順）

用途を目的とする) 代用女性人形の2つの意味が記載されている。

しかしなぜ「ダッチワイフ (オランダ人の妻)」なのだろうか。高月靖をはじめとする先行研究によると、17世紀初頭から1942年までインドネシアを植民地支配していたオランダ人が、熱帯地方で夜の寝苦しさを解消するために利用していた竹製の抱き枕「竹夫人」——『世界大百科事典』によると、宋時代(960年-1279年)の蘇軾(蘇東坡)の詩句にあることから11世紀前半には中国にあったとされている——を愛用しており、その姿をみたイギリス人が揶揄を込めて「オランダ人の女房」と呼んだことが始まりだという(高月、2009年; 西村、2004年)。先の『日本国語大辞典』には、竹越与三郎の『南国記』(1910年)第5章「爪哇及び蘭領諸島」第4節にあたる「バタヴィア奇観」の文章の一部、「和蘭人は一個普通の枕を以て頭を受け、他の一個の長枕を懐きて寝ね、これを以て毛布に代ゆるなり。此枕の長さ4尺余<sup>3)</sup>に達す。英人之を笑ってダッチワイフと云ふ」(竹越 95-96)が引用されており、イギリス人が竹夫人を抱くオランダ人の姿をみて「ダッチワイフ」と呼んだことについて触れている。

また、オランダの外交官であり東洋学者・推理小説家でもあるR・H・ファン・フーリック(Robert Hans van Gulik, 1910-1967)が1961年に発表した“*Sexual life in ancient China* (邦訳:『古代中国の性生活』)”では、中国人が竹夫人を熱帯地方に持ち込んだことについて言及している。

一つは〈竹夫人〉、三尺ほどの長さの筒状の竹籠で、暑い夏の夜に両脚の間に入れて寝ると多量の汗をかく不快さを和らげる。中国人移住者がそれをもとのオランダ領東インドおよびその他東南アジア諸地方に持ち込み、その地で「ダッチワイフ」と呼ばれた。(中略)身近だが役に立つこの二つの品は宋代に由来するという(フーリック 307)

このように、先行研究どおり、中国で誕生した抱き枕——もともとは人の形を模したものではなかった——である竹夫人が、中国人移住者によって熱帯地方に持ち込まれ、それを愛用するオランダ人の姿をイギリス人が揶揄し、抱いている対象をダッチワイフと呼んだということが確認できる。

### 3. 竹夫人、ダッチワイフへのエロティックな想像(妄想)力

次に、②いつからダッチワイフが性的なものを含意するようになったのかについてみていく。先行研究のなかでも、どの時期からダッチワイフが性交渉の代用人形の意味でも使われるようになったかを特定するのは難しいといわれている(高月、2009年; 西村、2004年)。しかし、なぜ特定が困難なのかという原因を知ることで、ダッチワイフが性的なものを含意するようになった経緯を浮き彫りにすることが可能になるのではないだろうか。そこでまず、出来る限り資料にあたってその原因を解明していく。

そもそも、ダッチワイフという単語自体がメディアのなかで登場したのは、筆者の調べによると、1918年1月15日『朝日新聞』(東京・朝刊)の「東人西人」(現在の「天声人語」にあたる)である。

南洋帰りの永井柳太郎君は、昨今至る處で熱帯風物談に例の廣長舌が揮廻してゐるが、先生の博識を以てしても蘭領名物のダッチ・ワイフに接したとは今度が初めてださうだ/ダッチ・ワイフは支那の所謂竹夫人で、日本には早くから俳句の題までになつてゐるから、永田君は今年の夏あたりから支那和蘭折衷の竹夫人を試みられるがよからう

当時の日本人からすると、竹夫人という呼称のほうが馴染みがあったことがうかがえる。俳句の題になっているとあるが、現在でも夏の季語として用いられており、『図説 俳句大歳時記』をみると、寛文3年(1662年)の『増山の井』より「竹婦人」として所出していることが確認することができる。また、正徳3年(1713年)『滑稽雑談』には「劉熙が、釈名に曰、竹几、また竹夫人といふ」(四時堂 539)とある。釈名とは、後漢(25年-220年)末の劉熙が著した全8巻の辞典のことである。つまり、前述した宋時代よりも前の220年前後には、すでに竹製の抱き枕に竹夫人という名付けがなされていたということだ。しかし、なぜ竹夫人と名付けたかについては現段階では特定に至っていないため、引き続き調査を続ける。

さらに、新聞記事に登場する「竹夫人」の記述は、1892年7月10日『読売新聞』において、堀野三華が執筆した「復古しらべ 竹婦人の名稱」というコラムに遡ることができる。このコラムでは、俳諧句における竹夫人(紙面では竹婦人と表記)という名称が「不穩當なる名稱にして殆婦人と玩弄物視」(堀野 2)していると苦言を呈している。つまり、抱き枕にすぎない竹夫人が、生きた成人女性の代わりとされ、慰みものとしてもあそぶ対象とされていることを指摘しているのだ。もちろん、俳句で使われる全ての竹夫人がそういった意味を含んでいるわけではない<sup>4</sup>。しかし、寢床を共にする竹夫人自体に、どこか性的な用途を想起させる要素があったということは確かなようだ。すなわち、竹夫人と名付けられた段階ですでに性的な意味合いが含まれ、ダッチワイフにもそれが継承されたと考えることができるのではないだろうか。

竹夫人、ダッチワイフに対するエロティックな想像(妄想)力は、俳句のみならず詩や文学作品にも見受けられる。例えば、角田竹夫の『竹夫人』(1925年)、丸木砂土の『和蘭妻—ダッチ・ワイフ』(1933年)、井上友一郎『竹夫人』(1943年)などが挙げられる。

なかでも1930年前後の東南アジアが舞台となる『和蘭妻—ダッチ・ワイフ』<sup>5</sup>は、欧州行きの汽船が火事になり、マレー半島のペナンの港に遭難した日本人男性たちの会話によって話が進む短編小説だ。宿泊したホテルのベッドに設置されていたダッチワイフをみて、以下のような会話を交わす。

「女房で思い出したんだが」／「ははあ、あれじゃないか」／とすぐ応じたものがある。  
／「何だ。何だ」／「昨夜のあれだろう」／「あははは」／「あいつの使用法、分っていたかい」／(中略)／「あの、そら、寝台の上に、枕の外に、いやに細長い、軟かくって、ぐにゃした、枕のようなものがあつたじゃないか」／(中略)／「君は、どういう風に使用したね」／「僕ですか」／「あははは」(丸木 12-13)

このように、ダッチワイフの扱いについて探りを入れる会話が繰り返されているが、その後にくる会話のなかに、性的な用途で使用していたことがほのめかされている。

「又、早く日本へ帰りたい、か」／「夫の貞操を守らんと、女房に相済まんが……」／「そこでダッチ・ワイフに想いを寄せるか」(丸木 17)

女房ではない生身の(異国の)女性と肌を合わすことは貞操を破ることになり、女房に申し訳が立たない、つまり、夫が自身の貞操を守るために用いるのがダッチワイフ、といった様相を帯びている。

ここで改めて【表 1】をみると、『基本外来語辞典』には、戦前昭和と戦後昭和から平成時代でダッチワイフの意味が変化したという記載がなされている。しかし、今までみてきたように、竹夫人と呼ばれていた段階からすでに性的な意味合いを孕んでいたと仮定するならば、ダッチワイフの意味が戦前昭和と戦後昭和で変化したときっぱりいい切るのは難しいだろう。とはいうものの、ダッチワイフが性具と安直に結び付け難い。なぜならば、性具としての等身大人形が他に存在していたからである。

#### 4. 性具としての等身大人形とダッチワイフの合流

少し時代が遡るが、江戸時代に吾妻形人形——手足が動く木製の等身大人形の股間部分に、女性器を模した吾妻形と呼ばれる自慰道具をはめ込んだもの——が密かに制作されており、『色道大鏡』や『宝暦風俗集』といった浮世草子には、吾妻形人形についての話がある<sup>6</sup>。いずれも参勤交代によって離れ離れになった妻、ないしは恋仲にあった遊女を模した人形を作らせ、自分のそばに置いておくというものだ。つまり、前章でみた竹夫人と同様、遠く離れた場所に男性が単身で赴いた際、自身の貞操を守るために吾妻形人形を用いていた可能性が高い。もちろん、それを制作するにはそれなりの金額が必要となるため、限られた層の男性しか所持できなかったということも留意する必要があるだろう。

またここで【表 1】を確認してみると、『図解外来語辞典』には「戦地や極地などで男性の自慰の対象として用いる」とあり、身体の管理、規律の問題と関わってくるようになる。高月によると、日本では大正時代に陸軍軍医学校で兵士を対象とした自慰器材の研究が行われ、「疑似女体」が用意されたという。性病対策として行われたこの研究であるが、「疑似女体」は「胴人形」と呼ばれており、民間に流通していたものを警察が押収して軍に提供したものだそう（高月 [2009 年] 24-25）<sup>7</sup>。

さらに高月によると、男ばかりで長期間過ぎさなければならぬ水夫たちが、「航海の妻=dame de voyage」という性欲処理の道具を早い段階から利用しており、19 世紀末には人形の体裁を備えていたという（高月 [2009 年] 15）。そういった水夫の内実を踏まえ、かつ中国（支那）を舞台としている読み物が、1932 年 7 月 11 日『読売新聞』（夕刊）の「日曜巷談」に掲載されている。「マドロスと抱き人形」と題されたこの読み物は、題の通りマドロス（水夫）と抱き人形の悲話が紹介されている。

支那某地連絡、××汽船貨物船長山丸（2,900 トン）——仮名の機関夫瀬野三吉（29）は、さういって寢室を出た。話の相手は、だが人間ではない。船員用の等身大の人形なのである。ながい、潤ひのない女氣欲しい航海生活には、なくてはならない『美貌の友』なのである。／瀬野は彼の女をやめた前の船長から貰ったのであるが、大事にして眺めてみると、ふしぎにも、去年死にわかれた妻の顔立ちと、そつくりに出來上つてゐる。瀬野はむやみやたらに、物をいはない彼の女に溺愛をそゝいだ。

「等身大の人形」というだけでダッチワイフとは明記されていないが、男性しかいない航海のお供としてそういったものが必需品であったことは示唆されている。特に興味深いのは、等身大の抱き人形と妻を重ね合わせていることだ。瀬野は死別した妻に似た抱き人形を「みい公」と呼んで溺愛していたが、喧嘩をした仲間の秋田によって盗まれてしまう。「みい公」がナイフで傷つけられてい

るところを発見した瀬野は、秋田と取っ組み合いの喧嘩をし、「みい公」と一緒に海に投げ捨てられる。最終的に瀬野は助かり、秋田は殺人未遂罪で収容されるというのが結末だが、抱き人形に亡き妻を重ね合わせて奪い返そうと死闘する様は、抱き人形が単なる女性の代用物ではない存在となっていた——もちろん、これは読み物の域を出ないが——と読み取ることができるだろう。

先行研究のなかでは、ダッチワイフが性交渉の代用人形という意味合いとして一般的に知られるようになったのが、第一次南極地域観測隊（1957年-1958年）の「南極一号（通称：ベンテンさん）」であることで見解が一致している（高月、2009年；西村、2004年）。

当時の隊長だった西堀栄三郎は、1985年に『南極越冬記』を出版し、そのなかで性交渉の代用人形の存在をほのめかしている。

（五月）十日。イグルーを整備し、人形をおく。みんな、この人形を、ベンテンさんとよんでいる。わたしは、越冬を実行するまえに、この問題をどう解決したらよいか、いろいろ考えた。大して重大に考えなくても、けっこうコントロールがつくようにも思えるし、また、越冬隊員には若くて元気な人もいるのだから、やはり処置をこうしておかなければならないようにも思う。出発前に、オーストラリアを訪ねたときも、わたしは、ざっくばらんにむこうの人たちの経験も聞いてみた。いろいろ考えたすえが、こういう案になったわけである。（西堀 73-74）（カッコ内は筆者補足）

この「ベンテンさん」が性交渉の代用人形であるという直接的な記述はないが、「コントロールがつく」「若くて元気な人」が必要とする人形となると、おおよそそのような用途の人形であることの見当がつくだろう。11人の越冬隊員のうち医務を担当していた中野証紀も1958年に『南極越冬日記』という著書を残しており、西堀がほのめかしていたベンテンさんの正体を克明に記述している。

日本には昔からあったかどうか知らない。西欧ではすでに古くからあってコイツス・イドラートルの対象とされたものらしい。だから日本の名称はない。低級な雑誌や新聞にはダッチワイフなどと書いているが、ダッチワイフというのは普通シンガポールやジャバあたりの熱帯のホテルなどにそなえつけられている枕の一種である（中略）わたくし達が弁天様といっていたのは一種の等身大の人形である（中略）腰、臀部の内部には金属の罐がはめこまれていて、これにおよそ4リットルのお湯を入れてネジでとめ、局部、腰部を暖められる。シャイデに相当するところは滑剤を塗る必要があるし、事後消毒、洗滌もしなければならぬ。（中野 83-84）

西村（〔2004年〕240）によると、「シャイデ」は膺を意味する。つまり、ベンテンさんは性行為が可能な等身大の人形であることが確認できる。また、この記述からすると、1958年以前から雑誌や新聞のなかでダッチワイフが性交渉の代用人形という取り上げられ方があったようだ。中野曰く、西堀が作ったイグルーは5月26日の時点でブリザードに破壊され、中にいたベンテンさんは誰も利用することのないまま雪の下に埋没してしまったという（中野 102）。

戦後の国家的な科学プロジェクトとして大きな注目を浴びていた越冬観測であるが、一部大衆誌では観測隊の性欲解消問題について取り沙汰されていた。その話題性も後押ししたのか、1960年代ごろからビニール製の空気式人形がアダルト・グッズとして生産・販売されるようになっていき、それが「ダッチワイフ」という呼称として知られていくようになる。

## 5. まとめと今後の研究の展開

ダッチワイフに性的なものを含意するようになった起源をたどることが難しいとされている理由として、元となる抱き枕としての竹夫人に対する想像(妄想)力の多層性と、性具としての等身大人形の存在が複雑に絡み合っていることが挙げられる。今までの例で挙げたように、古くから俳句や詩といった創作物のなかでは竹夫人やダッチワイフを性的な対象として捉えている描写があったが、実際にそれらを使って性行為をしたという事実があったかは、現時点で確認はできていない。

しかし、竹夫人、ダッチワイフと性具としての等身大人形の共通点を見出すならば、それは、それなりに大きさのあるものと人間の全身が〈触れる〉ことだ。その〈触れる〉行為そのものが、愛情表現ひいては性行為——それは、抱き枕を抱いて眠るオランダ人をイギリス人が見て「ダッチワイフ」と揶揄したように——を想起させ、いつしか同一視されるようになったのではないだろうか。また、抱き枕としての竹夫人、ダッチワイフしかり、性具としての航海の妻や吾妻形人形しかり、配偶者を意味する「夫人」や「ワイフ(妻)」という単語が両方に対して使用されている点も原因の一つかもしれない。これについては十分な考察が深められなかったため、機会を改めたい。

以上のように、ダッチワイフは抱き枕としての竹夫人を起源とし、全身が〈触れる〉という共通点から、性具としての等身大人形と意味を同じくするようになる。これらが必要となった理由は、男性が単身で戦争や極地へ赴く機会が生まれたことによるが、そこには単純な性処理を目的としたもののみならず、性病対策といった身体の管理化が働いていることにもよると想定される。これに関しては引き続き検討していきたい。

そして、遅くとも1958年までには、人の形をした性処理目的の等身大人形がダッチワイフと呼称されるようになったことを今回確認することができた。つまり、もともとダッチワイフと呼ばれていたものは性具ではなく、全身が〈触れる〉ことから端を発した想像(妄想)力によって性具と誤認され、最終的に性具になったということである。

これを踏まえたうえで、今後、1960年代以降に性具として一般に流通し、望めば誰でも手にすることができるようになったダッチワイフ——のちのラブドール——がどのように受容、需要されていったのかについて、〈触れる〉こととそれに関連する〈皮膚〉の視点——精神分析学者のディディエ・アンジュー(Didier Anzieu, 1923-1999)が提起した「皮膚-自我」という概念<sup>8</sup>、そしてアンジューの概念を発展させ、皮膚をめぐる観念史を論じたクラウディア・ベンティーン(Claudia Benthien, 1965-)の研究を参照しながら——から、考察を深めていきたい。というのも、触覚は歴史的に早い段階から親密さの感覚として理解されていたにもかかわらず、近代以降、特に後期近代になると、人に〈触れる〉ことが忌避されていくような傾向になっていく。性的なものに限定して例えを挙げるならば、避妊技術の普及——膜越しの接触——やエイズ・パニック、メディアの発展によるバーチャル・セックスの普及などがあるだろう。そこには哲学者のミシェル・フーコー(Michel Foucault, 1926-1984)がいう身体の管理化の系譜をみることもできるかもしれない。また、社会学者のアンソニー・ギデンズ(Anthony Giddens, 1938-)は、個人の自発的な選択に基づく関係性、つまり親密性を共同体に限定しなくなったことで親密性が変容した——相手に心を開いたり、気持ちを通じ合わせる自己開示コミュニケーションの重要性——と指摘しているが、〈触れる〉ことを前提とした性交渉の代用人形は果たして親密な対象になりうるのかといった、現代における親密性の変容についてもラブドール研究を通じて検討することができるだろう。

ラブドール研究をすることは、単に性交渉の代用人形の進化を追うだけではない。むしろ、〈触れ

る)ことを前提とした性交渉の代用人形を通して、人間の身体——特に生殖に関わる器官——がどのように管理・規律化され、内面化されていくのか、そして、親密性の条件ないしは対象にどのような変化——友人、恋人、夫婦といった関係性の区別は必要なのか、そもそも対象が人間である必要はあるのか——が起り、今後どういった諸相を帯びていくのかといった、ジェンダー、セクシュアリティの研究に新たな視点を提供することができるのではないかと考える。

## 引用文献リスト

### 書籍

- 石綿敏雄編『基本外来語辞典』東京堂出版、1990年。
- 荻上チキ『セックスメディア 30年史—欲望の革命児たち』筑摩書房、2011年。
- 角川源義『図解 俳句歳時記 夏』角川書店、1964年。
- 岸本重陳監修『カタカナ語・略語辞典 [改訂新版]』旺文社、1996年。
- 四時堂其諺編『滑稽雑談 第1』国書刊行会、1917年。
- 下中邦彦編『世界大百科事典 20』平凡社、1981年。
- 高月靖『南極1号伝説—ダッチワイフの戦後史』文藝春秋、2009年。
- 「ダッチワイフと『空気人形』」谷川建司ほか編『サブカルで読むセクシュアリティ—欲望を加速させる装置と流通』青弓社、2010年、143-166頁。
- 竹越与三郎『南国記』二酉社、1910年。
- 中野証紀『南極越冬日記』朝日新聞社、1958年。
- 西堀栄三郎『南極越冬記』岩波新書、1993年。
- 西村大志「ダッチワイフ」井上章一&関西性欲研究会『性の用語集』講談社現代新書、237-245頁、2004年。
- 『「人体模倣」における生と死と性』井上章一編『性欲の文化史1』講談社選書メチエ、2008年、199-235頁。
- 「世紀末転換期の『人体模倣』」田中雅一編『侵犯する身体』(フェティシズム研究第3巻)、京都大学学術出版会、2017年、135-165頁。
- 日本国語大辞典 第二版 編集委員会、小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典 第二版』第8巻、小学館、2001年。
- 伴田良輔編『ダッチワイフ』(シリーズ紙礫11)、皓星社、2017年。
- フーリック、R・H・ファン『古代中国の性生活—先史から明代まで』松平いを子訳、せりか書房、1988年 (Gulik, R.H. van, *Sexual Life in Ancient China: A Preliminary Survey of Chinese Sex and Society from ca. 1500 B.C. till 1644 A.D.*, rev. edn; Sinica Leidensia, 57; Leiden: Brill, 2003.)。
- 丸木砂土「和蘭妻—ダッチ・ワイフ」伴田良輔編『ダッチワイフ』(シリーズ紙礫11)、皓星社、2017年、8-21頁。
- 吉沢典男『図解外来語辞典』角川書店、1979年。

## 新聞記事

堀野三華「反古しらべ 竹婦人の名稱」『読売新聞』1892年7月10日、『ヨミダス歴史館』、参照年月日：2018年3月15日 <http://www.yomiuri.co.jp/database/rekishikan/>  
「東人西人」『朝日新聞』1918年1月15日、朝刊、『聞蔵Ⅱビジュアル』、参照年月日：2018年3月15日 <http://database.asahi.com/library2/>  
「日曜巷談 マドロスと抱き人形」『読売新聞』1932年7月11日、『ヨミダス歴史館』、参照年月日：2018年3月15日 <http://www.yomiuri.co.jp/database/rekishikan/>  
木村尚貴「精巧ラブドール展 目立つ女性」『朝日新聞』2017年6月7日、朝刊。

---

<sup>1</sup> 菅の作品に対するコメントは、Twitterのツイートを集めて公開できるウェブサービス「Togetter（トゥゲッター）」にまとめられている。修了作品展への反応がまとめられたものは、「菅実花《ラブドールは胎児の夢を見るか?》への反応 Full」<https://togetter.com/li/933517>（最終閲覧日：2018年3月20日）、その後、朝日新聞社が運営するニュースサイト「withnews（ウィズニュース）」に掲載されたインタビュー記事に対する反応がまとめられたものは、「もしラブドールが「妊娠」したら...芸大院生が本当に伝えたかったこと-に対する反応」<https://togetter.com/li/965812>（最終閲覧日：2018年3月20日）で閲覧することができる。

<sup>2</sup> 本稿は、2017年10月21日に開催された第1回学習院大学身体表象文化学会大会内で発表した「人間-ラブドールの新たな関係—ギデنزの親密性論を手がかりに—」から、さらに内容を絞って加筆修正したものである。

<sup>3</sup> 4尺が約121センチメートルなので、4尺余はおおよそ120センチメートルから130センチメートルと推測される。

<sup>4</sup> 堀野は、『和漢文操』や『博物筌』、『歳時記』等には、竹・籐製の抱き枕を抱籠、竹奴、脚馬、竹笄、竹夾膝、抱節君といった類名でも使用されていることについて触れており、必ずしも竹製の抱き枕が竹夫人と呼ばれていたわけではないことが確認できる。

<sup>5</sup> 初出は『若草』9巻11号（1933年11月）。本稿では、伴田良輔編『ダッチワイフ』（シリーズ紙礫11）（皓星社、2017年、8-21）から引用。

<sup>6</sup> 吾妻形人形については花咲一男『江戸雑談 大蛸に食われた女たち』（三樹書房、2007年）、高月（2009年）、伴田が詳しく述べているので、そちらを参照されたい。

<sup>7</sup> 『帝国陸軍戦場の衣食住—糧食を軸に解き明かす"知られざる陸軍"の全貌（歴史群像）太平洋戦史シリーズ（39）』（学研、2002年）に詳しい記述がある。

<sup>8</sup> アンジュールによると、自我の形成は、赤ん坊が成長の過程で〈皮膚-自我〉を適切に構築することでなされるという。母と子間で生じる皮膚への刺激は、実際的な刺激からコミュニケーションへと変化し、十分な皮膚の接触を経てその接触が禁じられた時、初めて本当の象徴性や自我が生じる。そして、〈皮膚-自我〉が思考する自我へと変化したあとも、思考作用の背景として〈皮膚-自我〉は存続し続ける。しかし、母と子間で生じる皮膚接触が適切に構築されなかった場合、皮膚感覚のさまざまな不具合が生じ、自己の倒錯や破綻を引き起こすという。